

自閉スペクトラム症とHSPの比較検討と教育支援 —DSM-5とHighly Sensitive Person—Scaleの比較から—

鳴海 正也*¹・甲斐 綾奈*²

¹九州女子大学人間科学部児童・幼児教育学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

²若松コスモス保育園 福岡県北九州市若松区浜町2-10-13 (〒808-0024)

(2023年10月25日受付、2023年11月28日受理)

要 旨

本研究は、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder以下ASD) とHSP (Highly Sensitive Person以下HSP) の特徴を比較検討することによって、その共通性と差異を明らかにするとともに、特性に応じ教育環境と支援の在り方を明らかにすることを目的として行った。HSPのような特性がある人にとっては配慮が行き届いた教育環境が必須であることから、どのような経験がHSP傾向の強い人にとって苦痛やストレスをとまうのかを明らかにするための調査を行った。ASDとHSPの両者ともに共通して音に対しての易刺激性が認められる。一方、ASDにとっては中核障害であるこだわりがHSP傾向の人にはあまり見られない。HSPのある人には、教育環境での音刺激や視線不安に対する配慮が求められることが明らかとなった。

キーワード：音に関する低感覚閾、易刺激性、視線不安

1 問題と目的

「自閉スペクトラム症」(Autism Spectrum Disorder: 以下ASD)は、対人関係が苦手・強いこだわりといった特徴をもつ発達障害の一つである。自閉症に関する研究は、1943年にアメリカの児童精神科医レオ・カナーによって報告されたカナー症候群 (カナー型自閉症) を中心に行われてきた。このカナー型自閉症は正式な診断名ではないが、「言葉の発達の遅れ」「コミュニケーションの障害」「対人関係・社会性の障害」「パターン化した行動、こだわり」などの自閉症の特徴と知的機能の発達の遅れがある障害として認識されてきた。一方、同じ1943年にオーストリアの精神科医師が論文として発表されたアスペルガー (Asperger) 症候群は、社会性・コミュニケーション・想像力・共感性・イメージすることの不得意さ、こだわりの強さ、感覚の過敏などを特徴とし、知能や言語に遅れのないものをアスペルガー症候群と定義されてきた。両者の差異の大きな部分は、過去においては知能と言語の遅れがあるかどうかという点であると考えられてきた。

近年になって自閉症はスペクトラムだという考えが浸透し、臨床場面で使われることが多いDSMがDSM-5に改定された2013年以降、ASDは神経発達症 (Neurodevelopmental Disorder) に分類された。DSM-5の翻訳の際に、特に児童・青年期については「障害」ではなく「症」を使用する方向に変更がなされた。このDSM-5でのASDの規定の変更の特徴的は、それぞれの症状がスペクトラムであることを明確にし、知能の程度によりその症状を区分しないという傾向を確定づけた。松本英夫 (2021) によればDSM-5のASDの診断基準は、いわゆる自閉症の3徴のなかの、社会性の障害、コミュニケーションの障害の2つが診断基準A (社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的な欠陥) を形成する。すなわち、①相互の対人的-情緒的関係の欠陥、②対人的相互反応で非言語的コミュニケーション行動を用いることの欠陥、③人間関係を発展させ、維持し、それを理解することの欠陥とされた。残りの興味の限局や強いこだわりが診断基準Bを形成し、さらに「感覚過敏あるいは鈍麻」がBに追加されている。と述べている。「感覚過敏あるいは鈍麻」が加えられたことは、Aron (1997) が規定したところの感覚処理感受性の高い人であるHSPとの関連性が想起される変更である。また、神経心理分野から池田一成 (2023) は、HSPの理論では環境への敏感さが大脳右半球の活性に基づくとする。類推すると、ASDで生じる感覚処理障害 (以後SPD) には並行的伝導路の過活動に加え、半球間で非対称な離散的伝導路の活動が寄与すると考えられる。と述べている。このことから、障害と感覚の敏感性の関係をうかがい知ることができる。

HSPを例に出すまでもなく、人によって物の感じ方や捉え方、刺激に対する受け止め方は様々である。

Aron(1997)はこのような感覚の個人差を感覚処理感受性と述べている。先にも述べたように、Aron(1997)は感覚処理感受性の高い人を、「HSP」を提唱した。舟橋(2013)によると、感覚処理感受性の高さとは、「些細な刺激にも気づき、その刺激に反応し、われわれ人間は刺激に対して慣れが生じるが、たとえその慣れが生じても刺激に対してすぐにまた反応し、そして感覚の閾値の変動がほとんどないこと」と定義されている。つまり、HSPは非HSPよりも感覚の閾値が低く刺激に対して敏感で、人一倍繊細であるということである。敏感性をもって生まれたHSPは多くのストレスが常につきまとい、ストレス要因と折り合いながら暮らす必要が生じる。ASDの障害とHSPの気質をその他の症状や障害と混同しないように注意が必要である。多くの人はHSPの気質を「恥ずかしがり」「引込み思案」といった、いわゆる「内気」と同じものだと考えている。内気とは状況に応じた反応のことであり、その人の持っている気質ではないし、遺伝でもない。一方で、HSP気質が遺伝であることは、Licht(2011)の研究により明らかとなっている。また、ASDにもHSPと同様に感覚過敏の特性が見られるため、HSPは発達障害と誤解されやすい。しかし、ASDに見られるこだわりの強さや社会的コミュニケーションの難しさはHSPやSPDに見られる特性ではないため、神経発達症(ASDを含む)とは別物として考えるが適切であるのかもしれない。

Aron&Aron(1997)は、敏感性を測定するため、また感覚処理感受性の概念が内向性や神経症傾向などのパーソナリティ傾向とは異なることを検証するために27項目のHighly Sensitive Person-Scale(以下HSPS)を作成した。国内でも高橋亜紀(2016)によるHSPS-19や、舟橋亜紀(2013)による成人用感覚感受性尺度が作成されている。しかし、これらのHSPSには難点もある。例えば、高橋亜紀(2016)が作成したHSPS-19では、第3因子の美的感受性の信頼性係数が低く信頼性が高い尺度であるとは言い難い。そこで、永松岳(2019)は尺度項目を23項目とし、「易興奮性」「音に関する低感覚閾」「環境変化への気づき」の3因子に分析した改訂版HSPSを作成している。改訂版のHSPSには、逆転項目も使用されており、より信頼性の高いHSPSであることが言える。このようにHSPという考え方は近年、国内でも徐々に注目されてきている。それは研究者の世界だけにいえることではない。現在、芸能人がメディアやSNSを通じて自身がHSPであることを公表したり、HSPに関する著書が多く出版されたりしてきている。それによりHSPについて関心を持つ人やHSPを身近に感じる人が増加していると推測できる。自分自身がHSPなのではないかと感じている人も多いのかもしれない。エレイン・N・アロン(2020)によると、世界の全人口の15%から20%の人がHSPの性質に当てはまるといわれていると述べられている。また、ASDとHSPが併存する率として一般には10%程度と言われているが大規模な疫学的調査は行われていない。

HSPの性質は環境によって消えることがあるといわれている。これは、ASDが環境によって、資質を持っていても発症しないことがあるという考えと方向性が同じだといえる。しかし、とらえ方によっては、環境によってHSPの特性が強く表れる可能性があるという捉えることができる。HSPは非HSPに比べると、刺激に対して敏感であり、物事を深刻にとらえやすい傾向がある。また、感性が高く、他人が気づかないような些細なことにも気づきやすい。このような傾向を持つ人々にとって「学校」は非常にストレスを感じやすい場所のひとつであり、HSPの特性が特に強く表れる環境のひとつが「学校」ではないかと推察する。たとえば、それほど話したことがない生徒同士で行われるグループ活動やグループ討議などの場面がそれにあたる。感覚処理感受性が高い人は、周囲のストレスフルなエネルギーを選択することなく自分に取り込んでしまうためかなり気疲れする傾向がある。そのため、HSPはグループでの話し合いの中で、自分の発する言葉を相手がどのように受け止めるのかを気にしすぎてしまい、精神的に疲れてしまうことが想定される。また、HSPは内気であると勘違いされやすく、その性質が理解されにくい。また、養育者は敏感さのマイナス面に目が向きやすく、不安や育てにくさを感じる。教育場面でも教師の困難感を引き起こすことがあるとされている傾向があるともいわれている。このような現状が学校生活において、さらにHSPにストレスをもたらせる環境となっている可能性がある。

本研究では、ASDとHSPを両者の易刺激性や刺激に対する過敏性に着目し、その共通性と相違を明らかにすることを通じて、二次障害を起ささないための教育での配慮事項に関して明らかにしていきたい。

II 方法

調査方法：質問紙調査

調査対象：大学生 66名（女性 66名）

調査項目：① 永松（2019）のHighly Sensitive Person—Scale（以下HSPS-23）を用いたHSP傾向の測定を5件法で測定を行った。
② これまでの学校生活を通して感じた不安やストレスについて（小学校・中学校・高校それぞれについて尋ねた。）

分析方法：数量分析においてはHADを使用した。自由記述においては、KHCoder Ver3.0を使用し、抽出語リストの作成、階層クラスター分析・共起ネットワーク図の作成を行った。

III 結果

（1）Highly Sensitive Person—Scaleの記述統計

永松（2019）のHSPS-23を使用し、5件法で測定を行った。各項目で、自分に最もよく当てはまるものを1つ選び、その数字に丸印を記入してもらった。平均値と標準偏差は表1であった。

表1 HSPS-23各項目の点数の平均および標準偏差

Highly Sensitive Person—Scale の項目	平均	標準偏差
大きな音に対して過敏に反応する	3.167	1.184
かすかな物音にビクビクする	2.138	1.044
突然の大きな音に心臓が止まりそうなほどびっくりする	2.742	1.339
話している相手の目線が気になる	3.500	1.127
課題が山積みになると何から手を付けていいのか分からなくなる	3.136	1.346
人混みが苦手である	3.385	1.234
環境の変化をすぐさま感じ取ることができる	3.288	1.019
ちょっとした気温の変化に気づく	2.924	1.057
忙しい日々が続くと部屋にこもってじっとしていたくなる	3.530	1.361
休息が必要なほど日々神経をすり減らしていると感じる	3.136	1.175
サイレンの音に圧倒されやすい	2.470	1.180
大きな音が不快であると感じる	3.227	1.200
たくさんのことが自分の周りで起こっていると不快になる	2.955	1.101
他人の気分に左右される	2.985	1.222
ケガをしている人を見ると自分も痛い感じがする	2.924	1.154
些細なことでも動揺しやすい	2.985	1.157
大きな音がわずらわしい	3.061	1.108
大勢の中で叱られていると自分が言われているように感じる	2.924	1.219
一度にたくさんことを頼まれるとイライラする	3.227	1.107
些細なストレスでは動じない	3.409	0.784
人混みは意識して避けるようにしている	2.864	1.188
自分を取り巻く環境の変化に気が付く	3.212	0.959
短時間にたくさんのことをしなければならぬ時、混乱する	3.424	1.216

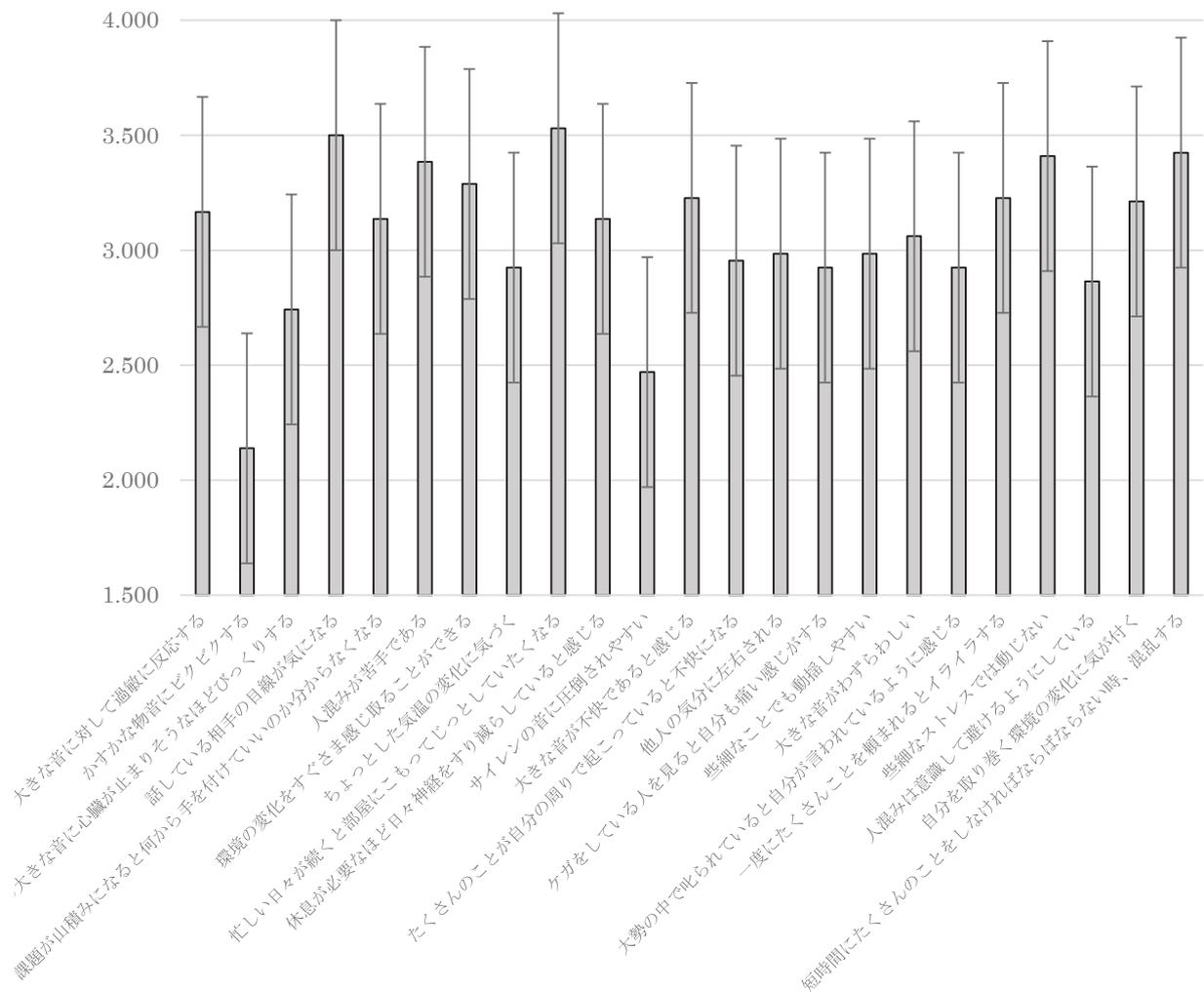


図1 HSPS-23の各項目の点数の平均と標準偏差

一般的な学生のHSPS-23の各項目の平均および標準偏差を求め、図1にまとめた。

平均値が高い項目を5項目列举すると「忙しい日々が続くと部屋にこもってじっとしていたくなる」(3.530)「話している相手の視線が気になる」(3.500)「短時間にたくさんことをしなければならぬ時、混乱する」3.424「些細なストレスでは動じない」(3.409)「人混みが苦手である」(3.385)に高い数値を示した。これらの項目は、永松岳(2019)の定義するHSPS-23の第1因子「易興奮性」に属する。(このうち、「些細なストレスでは動じない」は逆転項目である。)このことから、HSPの特性の中核が『易興奮性』(この論文では、刺激との関係から以降、易刺激性と記述する)の重要性が示唆される。一方、非常に低い平均値であった項目は「かすかな物音にビクビクする」(2.138)「サイレンの音に圧倒されやすい」(2.470)の2項目であった。この2つの項目は、3因子の中で、第2因子『音に関する低感覚閾』に属する項目であった。

(2) 学校生活を通して感じた不安や困りごと、ストレスについてのテキスト分析

小学校・中学校のそれぞれの学校生活の中で、これまでに感じた不安や困りごと、ストレスについて、自由記述で回答してもらった。自由記述の結果を、テキストマイニングを使用し、抽出語リストについては、語の重複や意味の同じ言葉に留意してコーディング化して棒グラフを作成した。また、階層クラスター分析を行って各クラスターの関係を作成し、共起ネットワーク図を作成して、構造を明らかにした。

① 小学校

多くの自由記述で「担任」と「先生」の言葉は小学校時点では同じ文脈で使われており、さらに、「人」「友人」「友達」「人間」は、同じ文脈で扱われていることから、いくつかの言葉はコーディングルールを使ったうえで今後の分析を行うことが適当であると思われる。小学校では下のようなコーディングルールを使用した。

*教師
担任 or 先生
*友達
人 or 友人 or 友達 or 学ぶ or 人間
*大人に怒られる
大人 OR 怒られる OR ト라우マ
*発表が苦手
人前 OR 発表できない OR 苦手 OR 無理やり当てる

図 2：抽出語リスト

「学校生活を通して感じた不安や困りごと、ストレスについて」の質問に対する自由記述の結果（小学校）を抽出語リストにまとめたものが図2である。上から順に、「友達 12個」「教師 8個」「発表が苦手 6個」「大人に怒られる 5個」のように多くは社会的活動への困りやストレスであり、小学校においては大人とのかわりに関する項目も多いことが明らかとなった。

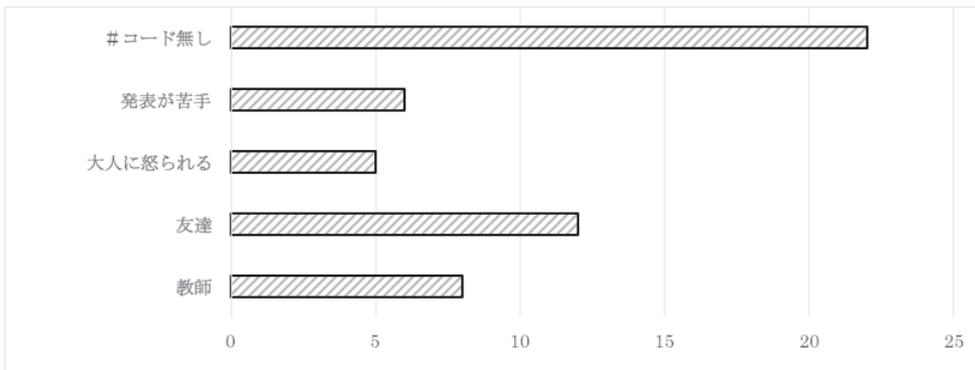


図 3：抽出語リスト小学校のクラスター分析

しかし、一方では「大声で怒られる」や「発表の時に人の視線が気になる」などの情動や感覚に関係すると思われる自由記述も見られた。

また、「学校生活を通して感じた不安や困りごと、ストレスについて」の質問に対する自由記述の結果（小学校）を階層クラスター分析したものが図4である。クラスター1「悪口・友達・人間・関係・親・不安・先生・怖い」といった人間関係に関することが抽出された。クラスター2「発表・苦手・多い・無理やり・担任・自分・前」という人前での発表や授業のこと、クラスター3「学校・行く・勉強・ストレス・感じる」では、学校に行くこと、自体へのストレス。クラスター4「怒る・友人・周り・気」では、友人関係、クラスター5「時間・給食・残す」では、給食がストレスになっている様子が見えがえた。

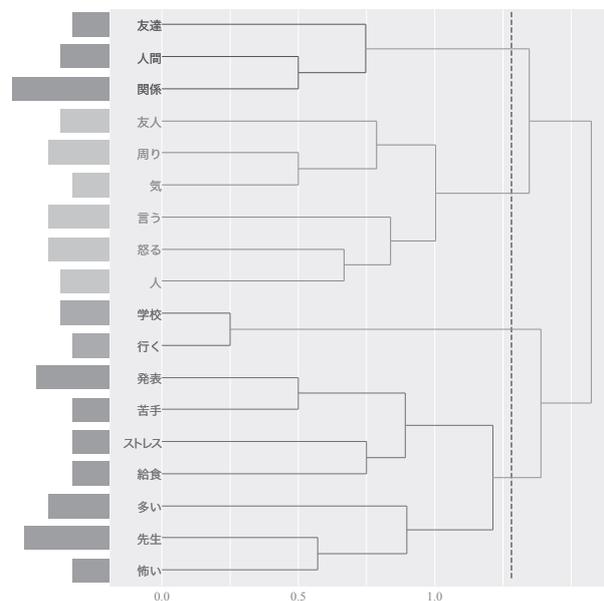


図 4：学校の階層的クラスター分析

さらに、図5は、「学校生活を通して感じた不安や困りごと、ストレスについて」の質問に対する自由記述の結果（小学校）における、共起ネットワーク図である。まず、「発表」「苦手」「担任」「無理やり」などの言葉の関連性が強く表れていることから、授業時に人前で発表にストレスを感じていたことが分かる。「授業中に手を挙げていないのに無理やり当ててきたり、発表できなかつたら全員の前で怒られることがあった。それ以来、同級生や先輩、先生の前で発表したり、注目されることが大変苦手である。」「人前で発表することが苦手だったので、発表する機会があるとその日は熱が出ることもあった。」などの回答が見られ、人前で発表がトラウマ化したり、PTSDを思わせる体験につながっていることが想像される記述されている。

また、「給食」「残す」「時間」の関連性も強く、強制的に給食指導されることに対するストレスが存在していたことが分かる内容である。「給食が多くて残したかったのに無理やり食べろと言われ、腹が立った。」「給食の時間に先生が厳しく、残すことが許されなかったのでストレスだった。給食の時間が来るとお腹が痛くなったり、気持ちが悪くなったりしていた。」など心身に症状が現れることがわかる回答も見られた。

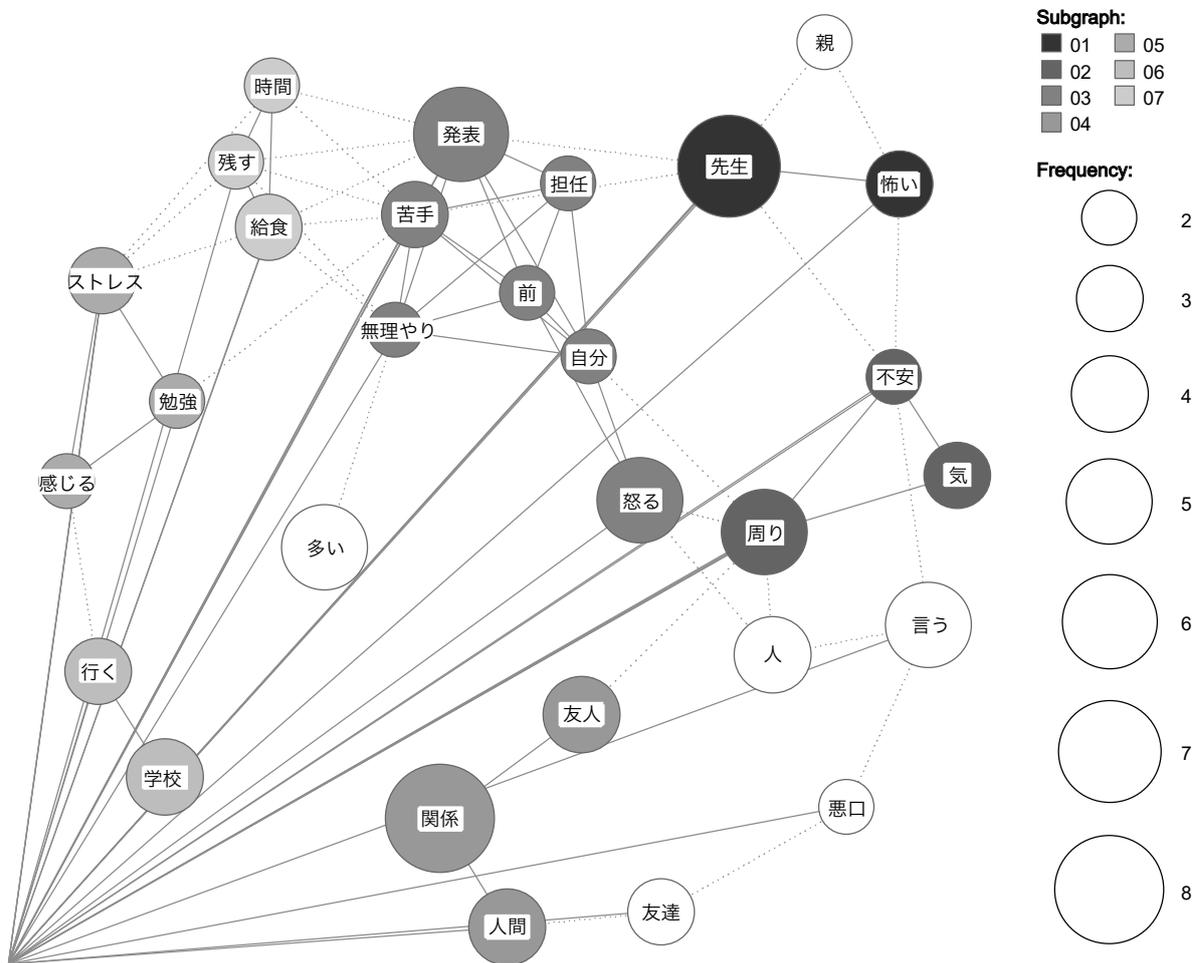


図5 小学校の共起ネットワーク図

さらに学校におけるストレスとして「関係」を中心とした人間関係・友人関係のストレスも多く表れている。一方、HSPに特有な『音に関する低感覚閾』『音に関する低感覚閾』に連なるような反応は小学校においては限定的で、むしろ、ASDにつながる社会的コミュニケーションの難しさが前面に出ているようである。

② 中学校

「学校生活を通して感じた不安や困りごと、ストレスについて」の質問に対する自由記述の結果（中学校）を抽出語リストにまとめたものが図6である。上から順に、「部活：14個」「受験・テスト：10個」「友人：10個」「教師：7つ」のカテゴリが抽出された。小学校と共通するのは友達関係がストレスとなっていることである。さらに、「部活動」「受験・テスト」も大きなストレスことがわかり、これらの項目は小学校で見られなかったが、学年が進行していくにつれて新たなストレスとして発生していることが読みとれる。

「学校生活を通して感じた不安や困りごと、ストレスについて」の質問に対する自由記述の結果（中学校）を階層クラスター分析したものが図7である。クラスター1「楽しい・高校・受験・勉強・生徒・見る・持つ・成績・姉・自分・緊張・不安」、クラスター2「怖い・顧問・厳しい・ルール・制服・先生・校則・苦手・夏」、クラスター3「小学校・部活・クラス・トラブル・人・周り・気」、クラスター4「テスト・悪い・親・毎日・怒る・ストレス・感じる」、クラスター5「悪口・言う・多い・辛い」、クラスター6「人間関係・活動・部」、クラスター7「立つ・先輩・部長」の7つのクラスターが析出された。

図8は、「学校生活を通して感じた不安や困りごと、ストレスについて」の質問に対する自由記述の結果（中学校）における、共起ネットワーク図である。

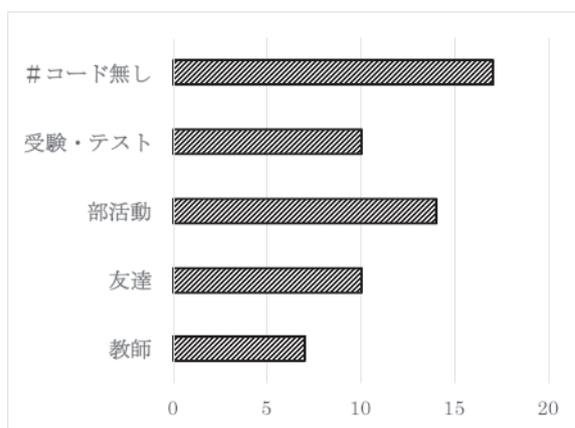


図6：中学校の抽出語リスト

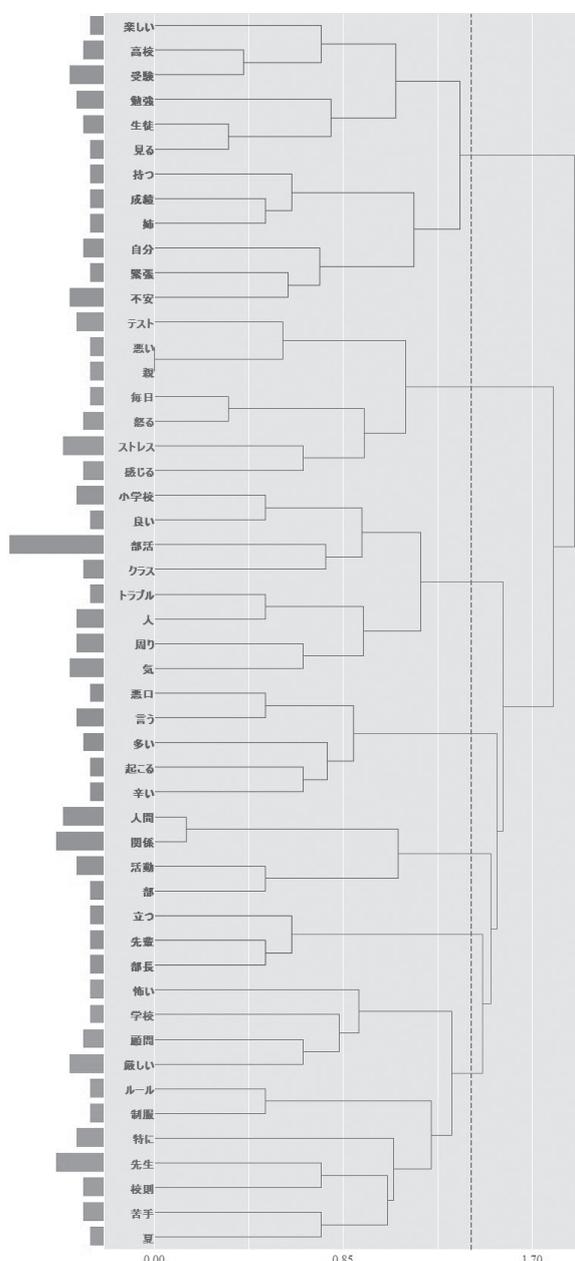


図7：中学校のクラスター分析

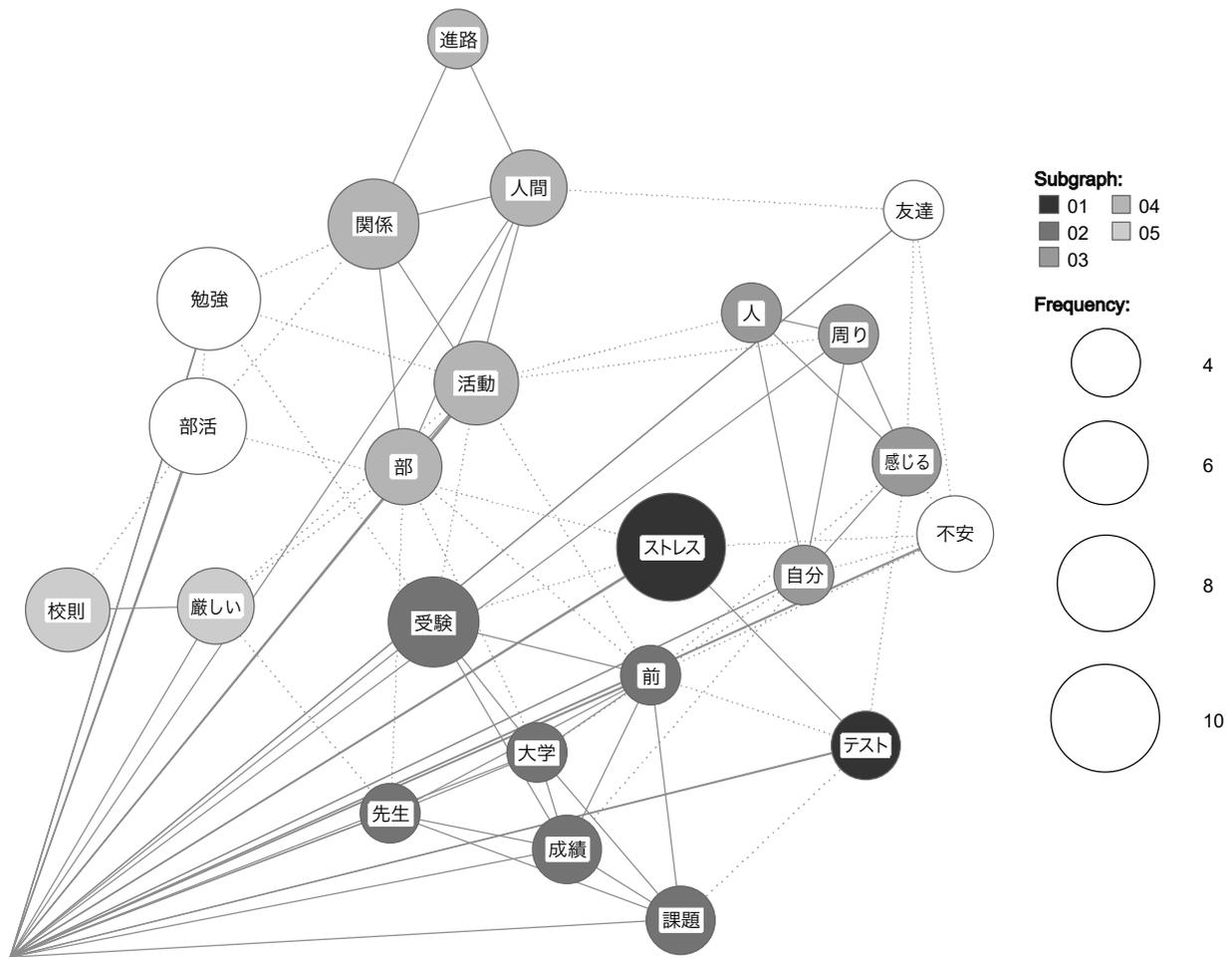


図8 中学校の共起ネットワーク図

まず、「受験」「テスト」「成績」を中心としたまとまりがあることから、受験勉強に対する不安やストレスが多いことが分かる。「高校受験を前にして緊張感を持って勉強しているときに、推薦入試などで一足先に合格が決まっている生徒が楽しそうに遊んでいたりと、騒がしくしている所を見て不安やイライラを感じていた。」「高校受験がとても不安だった。」などの回答が見られた。また、「人間」「関係」、「部」「活動」などのまとまりが見られる。「周りのひそひそ話す声が、自分のことを言われている気がして気になっていた。」「悪口を言うことでコミュニケーションを取ろうとする空気が苦手だった。」などの回答が見られた。といった音や言葉と人間関係が結びついているのが思春期の特徴的である。

さらに、「先輩」「部長」、「顧問」「厳しい」などの結びつきも見られ、部活動での自分自身の立場の変化や、部活動においてもストレスを感じていたことが示された。「部活で先輩が引退し、自分たちが一番上の学年になったとき、部長という立ち場に不安を覚えた。」「部活で顧問に怒られることがストレスであった。」「中1の時の部活の先輩がとても厳しかった。」などの回答が見られた。このように部活や進路が中学校では、小学校にみられなかった新たなストレス要因となり、増えることが明らかとなった。また、「ひそひそ話す声」や「大声で怒られる」などHSPの音に関する低感覚閾を連想させる回答が多く見られ、小学校の時より顕著に自覚化されることが分かった。調査項目が他の感覚過敏に言及していないために、HSPの音に関する低感覚閾とASDの感覚過敏について直接的に関連づけにくい結果となった。

③ 高HSP尺度群・低HSP尺度群に分けての結果

今回の調査 (Highly Sensitive Person—Scale全体での平均値は3.07であり、各調査項目において±0.5標準偏差を境として、高HSP尺度群と低HSP尺度群に分けて両者の違いを明らかにしようとした。両者のスコアの

違いは、スコアが3.6以上の人を「高HSP尺度群」、2.4以下の人を「低HSP尺度群」に分類した。その結果、高HSP尺度群は16名(24%)、低HSP尺度群は12名(18%)であった。

高HSP尺度群は16名のうち12名(75%)が学齢期に何らかのストレスを感じていたという回答を行っているのに対して、低HSP尺度群は12名のうち6名(50%)しか学校生活にストレスを感じていないことから、高HSP尺度群にとっては学校生活にストレスを感じやすい結果となった。高HSP尺度群にとっては、「同級生や先輩、先生の前で発表したり、注目されたりすることが大変苦手である。」「視線が苦手」といったような視線に対する恐怖感がみられるのに対して、低HSP尺度群にはそのような傾向がみられなかった。また、小学校時代の自由記述では、高HSP尺度に「周りで怒られている友人を見ると、自分も悲しくなった」や「先生にまた怒られる、また周りの人に何か言われるかもしれない」といった環境に対する感受性の強さが読みとれる回答が多く見られた。さらに、高HSP尺度の一部には、思春期以降に「周りのひそひそ話す声が、自分のことを言われている気がして気になっていた」という困りから「音、いきなりの音に敏感になった。」という音に対して年齢が上がるにつれて過敏になった特徴的なケースが数例認められた。ASDの感覚過敏は、パニックの原因になることがしばしばみられるが、HSPは、音に関する低感覚閾は見られるものの社会生活に支障をきたすようなものは少ない可能性が示唆された。

IV 考察

HSPは性格やパーソナリティとして議論されることが多く、人口の20%程度の人に見られるといわれている。また、ASDは障害として区分されその罹患率は2%強であると考えられている。また、HSPの人の中にASDを合併している人も一定数いるというのが通説となっている。しかし、両者の社会的な扱いは大きく違い、教育的配慮も大きく違っている。この両者の違いを感覚過敏の問題と困りの程度という2つの視点から考えていくことは、教育の中で重要な示唆を与えると考えられる。そこでこの2点から考察を深めていきたい。

(1) Highly Sensitive Person—ScaleにみるHSP特性とASDにみられる感覚過敏の関連

DSMの改訂のVer 5への変更契機に、自閉症の感覚特異性が改めて注目されるようになってきた。串崎、真志(2018)はその事例としてUKで自閉症と診断された116名(平均11.6歳)のうち92%、自閉症リスクで特別支援教育を受けている児童72名(12.7歳)のうち67%が、感覚過敏・感覚鈍麻・感覚的な関心のいずれかをもっていたという調査を列举し、感覚過敏とASDの関係を述べている。一方で、HSPという面から、Elaine Aron(Aron, Aron, & Jagiellowicz, 2012)は、刺激に対する深い認知的処理と高い情動的反応を感覚処理感受性(sensory-processing sensitivity)と呼び、そのような高い感性をもつ人を高敏感者(HSP)と呼んだ。Aron(1996, 2002)は、高敏感者が一般に15-20%いると考え研究を進めてきたと述べている。

しかし、本研究の対象者は一般的な大学生であることから、強い反応の多くが、「忙しい日々が続くと部屋にこもってじっとしていたくなる。」などといった誰もが日常生活の中で起こす反応に集中しているのは当然の結果である。両者の関係を理解するには、DSM-5への推移の中での特徴として追認された感覚過敏に焦点を当てながら、HSPについて考察することの方が、ASDとの関連を考える上では重要であろう。対象者の特性から、平均値より、大きな隔たりがありHSP傾向が顕著である高HSP尺度群でよくみられる反応がHSPの特徴をより確かに示すことになると考えられる。「かすかな物音にビクビクする」や「サイレンの音に圧倒されやすい」など、第2因子『音に関する低感覚閾』は重要な判断基準となると思われる。また、「同級生や先輩、先生の前で発表したり、注目されたりすることが大変苦手である。」「視線が苦手」のような視線や人に注目されることの苦手さも環境に対する過敏性として重要な判断基準となると考えられる。このことは、高橋亜希(2016)が神経症傾向に関しては第1因子“低感覚閾”と第2因子“易興奮性”のどちらも神経症傾向(情緒不安定性)と中程度の有意な相関がみられたと述べたことと同じ傾向を示す結果と言える。上記の2点がHSPとASDとも共通する特徴と言えるのが妥当であろう。

さらに、特徴的な点として高HSP尺度群において「(高校になって)大きな音、いきなりの音に敏感になっ

た」という記述が複数みられることから、音に関して低感覚閾の状態は小学校よりも思春期以降により強い反応を示し、意識化されるのではないかという推測がされる。今回は母数が少ないために確定的には言えないが、この思春期に増加する傾向は、必ずしもASDの持つ特徴とは一致しているわけではないことが類推された。

(2) HSPとASDにみられる重要な機能に対する困りの程度差

DSM-5のASD診断の4項目として追加された「症状は社会や職業その他の重要な機能に重大な障害を引き起こしている。」場合のみをASDとして診断するという改善点から考えると、HSPもASDともにその症状の程度によって日常生活の困りに程度の差があるように思われる。一般的には、ASDの方が重要な機能に障害を起こしているという表現にぴったりの事例が多い。ASDと比較して、HSPは、感覚特性として扱われることが多く、その困りの程度を直接的に比較することは難しい。このことに、それぞれの特性の認知度の違いに原因があるかもしれないが、当事者から見たときには、どちらも生活に困難性やストレスを感じているのは確かである。高HSP尺度群の記述には「毎日親に怒られており、それをストレスに感じて自傷行為をしていた。」とか「(高校生になって)大勢の中でほかの人が大声で叱られていると、自分も言われている気がして辛かった。大きな音、いきなりの音に敏感になった。」などのHSPの特徴から生活での機能低下を起こしている状況が読みとれるものが多く散見される。教育現場においてはHSPであろうがASDであろうが、感覚特性はすべての人が同じなのではなく、それぞれの人が感覚の多様性があり、そのことをもっと自覚して多様な配慮が加味された教育活動が行われるべきであると考えている。

V 成果と課題

HSPとASDのある人にはともに、音に対しての感覚過敏がみられるが、その程度はさまざまである。ただ、ASDのある人の方が多様な感覚過敏を示す例が多い。さらにどちらの特性も日常生活に大きな機能の支障がなければ、診断される必要がない特性である。ASDのある人が低年齢層から音への感覚過敏を訴えるのに対して、HSPは、思春期以降にその傾向が顕著になる可能性が示唆された。ASDのある人に見られる社会的コミュニケーションに関する困りも、両者に共通にみられる場合がある。しかし、ASDの障害中核であるこだわりは、HSPに関しては明確にみられない場合が多い。

HSPもASDのある人も、ともに刺激に対する過敏性に配慮しながら教育支援を行うことが二次障害を防ぐために重要である。今回の調査が、HSPの特性のある集団が対象でないことやASDのある人の集団に対してHSPSを実施した結果でないことからさらなる調査が必要である。

引用・参考文献

- ・串崎真志(2018): 高い感性をもつ子ども (Highly Sensitive Child) の理解: 自閉症・高敏感者・エンパス・不登校. 関西大学人権問題研究室紀要巻 76, p. 27-55,
- ・松本英夫(2021): ASDの診断基準の変更について. 公益社団法人 日本精神神経学会 The Japanese Society of Psychiatry and Neurology,
- ・池田一成(2023): 自閉スペクトラム症に見られる感覚処理障害の臨床神経生理学. 臨床神経心理学. 51巻. 第2号. 臨床神経心理学. 日本神経心理学会.
- ・杉山登志郎、市川宏伸、内山登紀夫、神尾陽子、安達潤、井上雅彦、辻井正次(2008): PARS について. スペクトラム出版社
- ・高橋亜希(2016) Highly Sensitive Person Scale 日本版(HSPS-19)の作成, 感情心理学研究, 23(2), 68-77
- ・永松岳(2019) Highly Sensitive Person-Scale改訂版作成の試み, 日本発達心理学会大会発表論文集, 31, 4-24
- ・船橋亜紀(2013) 成人用感覚感受性尺度作成の試み, 中央大学 心理学研究科・心理学部紀要, 12(2), 29-36
- ・神尾陽子, 齊藤崇子, 井口栄子(2006): 自閉症スペクトラム青年のネガティブ表情に対する過敏性. 児童青年

精神医学とその近接領域, 47, 16-28.

- ・田巻 義孝・堀田 千絵・加藤 美朗(2013): 知的障害、自閉性障害と DSM-5. 関西福祉科学大学. Journal of Human Environmental Studies, Volume 12, Number 2
- ・若林明雄・東條吉邦(2004): 児童用AQの作成と標準化. 国立特殊教育研究所分室一般研究報告 PP.35-48
- ・別府哲(2009): 特別支援教育に関する教育心理学的研究の動向と展望. 教育心理学年報, 48, 143-152.
- ・神尾陽子, 行廣隆次, 安達潤, 市川宏伸, 井上雅彦, 内山登紀夫, 栗田広, 杉山登志郎, 辻井正次: 思春期から成人期における広汎性発達障害の行動チェックリスト: 日本自閉症協会版広汎性発達障害評定尺度(PARS)の信頼性・妥当性についての検討(2006). 精神医学(ISSN: 04881281)48 巻 5 号 495-505(ISID:1405100265).
- ・辻井正次, 行廣隆次, 安達潤, 市川宏伸, 井上雅彦, 内山登紀夫, 神尾陽子, 栗田広, 杉山登志郎: 日本自閉症協会広汎性発達障害評価尺度(PARS)幼児期尺度の信頼性・妥当性の検討(2006). 臨床精神医学(ISSN: 0300032X) ,35(8) , 1119-1126,
- ・安達潤, 行廣隆次, 井上雅彦, 内山登紀夫, 神尾陽子, 栗田広, 杉山登志郎, 辻井正次, 市川宏伸: 日本自閉症協会広汎性発達障害評価尺度(PARS)・児童期尺度の信頼性と妥当性の検討. (2006) 臨床精神医学(ISSN: 0300032X) ,35(11) , 1591-1599,
- ・藤井恭子(2021) Highly Sensitive Person(HSP)特性を持つ大学生の新型コロナウイルス感染症の影響に対する認知の特徴, 教育学論究, 13, 105-115
- ・串崎真志(2018)高い感性を持つ子ども(Highly Sensitive Child)の理解: 自閉症・高敏感者・エンパス・不登校, 関西大学人権問題研究室紀要, 76, 27-55
- ・串崎真志(2019)エンパス尺度(Empath Scale): 高い感性を持つ人(Highly Sensitive Person)の理解, 関西大学人権問題研究紀要, 77, 37-54
- ・串崎真志(2019)高い感性を持つ人(Highly Sensitive Person)は物事を深く考える(1): スピリチュアリティとの関連, 関西大学人権問題研究紀要, 78, 1-14
- ・高野成彦(2020)HSCの視点による特別活動の学習内容と指導方法についての一考察, 大妻女子大学家政系研究紀要, 56, 97-106
- Miller LJ, Marco EJ, Chu RC, et al: Sensory processing across the lifespan. Front Integr Neurosci 15: 652218, 2021.
- ・高橋秀俊, 神尾陽子: 自閉スペクトラム症の感覚の特徴. 精神誌 120: 369-383, 2018.
- ・Dunn W: The impact of sensory processing abilities on the daily lives of young children and their families. Infants Young Children 9(4): 23-35, 1997.
- ・ American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th ed. American Psychiatric Publishing, Arlington, 2013 (高橋三郎, 大野 裕監訳: DSM-5: 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院, 2014).
- ・Mayer JL: The relationship between autistic traits and atypical sensory functioning in neurotypical and ASD adults. J Autism Dev Disord 47: 316-327, 2017.
- ・柳 民秀: ASD傾向と感覚処理傾向の関連. 北海道大学大学院教育学研究院紀要 137: 79-96, 2020.
- ・Baron-Cohen S, Wheelwright S, Skinner R, et al: The autism spectrum quotient (AQ). J Autism Dev Disord 31: 5-17, 2001.
- ・若林明雄, 東條吉邦, Baron-Cohen Sら: 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化. 心理学研究 75: 78-84, 2004.
- ・Yamasaki T, Maekawa T, Fujita T, et al: Connectopathy in autism spectrum disorders. Front Neurosci 11: 627, 2017.
- ・Khalifa S, Bruneau N, Rogé B, et al: Increased perception of loudness in autism. Hear Res 198: 87-92, 2004.

- Aron, E. N. (1996) . The highly sensitive person: How to thrive when the world overwhelms you. New York: Broadway Books.
- Aron, E. N. (2002) . The highly sensitive child: Helping our children thrive when the world overwhelms them. New York: Broadway Books.
- Aron, E. N. (2010) . Psychotherapy and the highly sensitive person. New York: Routledge.
- Aron, E. N., & Aron, A. (1997) . Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 345-368.
- Aron, E. N., Aron, A., & Jagiellowicz, J. (2012) . Sensory processing sensitivity: A review in the light of the evolution of biological responsiveness. *Personality and Social Psychology Review*, 16, 262-282
- Mansour Y, Kulesza R: Three dimensional reconstructions of the superior olivary complex from children with autism spectrum disorder. *Hear Res* 393: 107974, 2020.
- ElMoazen D, Sobhy O, Abdou R, et al: Binaural interaction component of the auditory brainstem response in children with autism spectrum disorder. *Int J Pediatr Otorhinolaryngol* 131: 109850, 2020.
- Aoki Y, Abe O, Nippashi Y, et al: Comparison of white matter integrity between autism spectrum disorder subjects and typically developing individuals. *Mol Autism* 4: 25, 2013.
- Matsuzaki J, Kagitani-Shimono K, Sugata H, et al: Delayed mismatch field latencies in autism spectrum disorder with abnormal auditory sensitivity. *Front Hum Neurosci* 11: 446, 2017.
- Yahata N, Morimoto J, Hashimoto R, et al: A small number of abnormal brain connections predicts adult autism spectrum disorder. *Nat Commun* 7: 11254, 2016.
- Ajram LA, Horder J, Mendez MA, et al: Shifting brain inhibitory balance and connectivity of the prefrontal cortex of adults with autism spectrum disorder. *Transl Psychiatry* 7: e1137, 2017.
- 飯村周平: 中学生用感覚感受性尺度 (SSSI) 作成の試み. *パーソナリティ研* 25: 154-157, 2016.
- Acevedo B, Aron E, Pospos S, et al: The functional highly sensitive brain. *Philos Trans R Soc Lond B* 373: 20170161, 2018.
- Acevedo BP, Aron EN, Aron A, et al: The highly sensitive brain. *Brain Behav* 4: 580-594, 2014.
- Asokan MM, Williamson RS, Hancock KE, et al: Sensory overamplification in layer 5 auditory corticofugal projection neurons following cochlear nerve synaptic damage. *Nat Commun* 9: 2468, 2018.
- Goris J, Braem S, Nijhof AD, et al: Sensory prediction errors are less modulated by global context in autism spectrum disorder. *Biol Psychiatry Cogn Neurosci Neuroimaging* 3: 667-674, 2018.
- Chao ZC, Takaura K, Wang L, et al: Large-scale cortical networks for hierarchical prediction and prediction error in the primate brain. *Neuron* 100: 1252-1266, 2018.
- Jiang Y, Komatsu M, Chen Y, et al: Constructing the hierarchy of predictive auditory sequences in the marmoset brain. *Elife* 11: e74653, 2022.

Comparative study and educational support between autism spectrum disorder and HSP – Comparison of DSM-5 and Highly Sensitive Person-Scale –

Masaya NARUMI^{*1}, Ayana KAI

^{*1}Department of Early Childhood and Elementary Education

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

The purpose of this study was to compare and examine the characteristics of autism spectrum disorder and HSP to clarify their commonalities and differences, and to clarify the educational environment and support that should be provided according to the characteristics. Irritability to sounds is common to both autism spectrum disorder and HSP. On the other hand, obsession, which is a core disorder for ASD, is less common among people with HSP tendencies. It has become clear that people with HSP need to be reasonable accommodation about sound stimulation and gaze anxiety in educational environments.

Key word : low sensory threshold for sounds, irritability, gaze anxiety